

『天主実義』の研究（二）：第二篇現代語訳

柴田，篤

<https://doi.org/10.15017/2328451>

出版情報：哲學年報. 55, pp.81-100, 1996-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

『天主実義』の研究(二)

——第二篇現代語訳——

柴 田 篤

はじめに

本稿は前稿^①に引き続き、イエズス会士マテオ・リッチ(中国名は利瑪竇、一五五二—一六一〇)の著した『天主実義』を現代語訳したもので、ここでは第二篇を取り上げる。

首篇において、「天主が天地万物を創造して、それらを主宰し維持することについて」議論がなされたことを承け、第二篇では「天主に関する世間の人々の誤解を説明する」ことが主題となる。ここでは、万物の生成や存在原理に関する中国人の考え方が取り上げられ、リッチ||カトリックの立場から質疑がなされる。中士(中国の学者)と西士(西洋の学者)との問答を通して、根源者に関するカトリックの考え方が更に明らかにされる一方、中国思想、殊に朱子学的存在論に対するリッチの理解の仕方がよく示されている篇である。また、この中でなされている中国古来の天概念に対する言及も重要な問題を含んでいると言える。なお、中国の思想・宗教に関するリッチの基本的な見解は、イエズス会本部宛の報告書の第一の書・第一〇章に詳しく述べられている。^③

〔注 釈〕

- (1) 拙稿「『天主実義』の研究(二)——序説と首篇現代語訳——」(『哲学年報』第五十四輯、一九九五)。
 (2) 内容については、拙稿「天主教と朱子学——『天主実義』第二篇を中心として——」(『哲学年報』第五十二輯、一九九三)を参照。
 (3) 「中国キリスト教史・一」(岩波書店『大航海時代叢書』第Ⅱ期第8巻)を参照。

〔凡 例〕

- 一、底本は、台湾学生書局「中国史学叢書」所収明版影印本『天学初函』による。
 二、便宜上、中土と西士の各発言の冒頭に、順に番号を付した。中土が奇数、西士が偶数となる。
 三、訳語については、以下の点に注意した。
 (1) 「天主」は、現在、日本のカトリック教会においては「神」と表現するが、原語のまま用いた。
 (2) 「中土」は中国の士大夫即ち儒学者を、「西士」は西洋の学者即ち修道士、つまりリッチを指すが、煩瑣になるので原語のまま用いた。
 (3) 儒学、殊に朱子学の概念・用語については、そのまま用いたが、必要に応じて説明を施した。
 (4) その他の表現については、できるだけ平易な現代語表記を心掛けた。
 四、訳文中、「()」は原文にない語を補ったところを、「()」は説明を施したところを、それぞれ示す。また、文章が続くところは、適宜改行した。
 五、現代語訳に当っては、「『天主実義』の研究(二)」序説所掲の諸注釈書等を参考にしたが、特別な場合を除き、一々注記はしなかった。

現代語訳 『天主実義』 上卷 (承前)

第二篇「天主に関する世間の人々の誤解を解明する」

- 1 中士が言った、「昨日あなたから拝聴した」深遠な御高説は、私の耳を満たし、私の心を酔わせ、一晚中そのことを考えて、眠る間も忘れるほどでした。今「且」またお教えを伺って、心にある疑いを晴らしたいと思えます。中国には「儒・仏・道の」三教があり、それぞれ一派を形成しています。老子は『万物は無から生じる』と説き、無を「根源の」道とみなします。^① 仏教は『すべての現象は空から生まれる「もので、実体がない」』と説き、空「を悟ること」を本来の務めと考えます。^② 儒教は『易に太極がある』と説きますから、「実」有（現実存在）を根本とみなし、誠「実」（実践倫理）を学ぶべきことがらだと考えます。^③ あなたは「三教の中で」どれが正しいとお考えですか」と。
- 2 西士が言った、「（仏・道の）二教が「万物の根源を」無とか空とか説いているのは、天主「の教え」の道理からすれば、非常に誤ったものです。それらを尊重すべきでないことは明白です。儒教で「万物の根源を」〔実〕有とか誠「実」とか説いている「という」のは、十分にその説を聞いたわけではありませんが、「天主の教えに」近いのではないでしようか」と。
- 3 中士が言った、「中国の有徳者（儒者）は、（仏・道の）二教を痛烈に排斥して、「彼らを」深く憎悪しています」と。
- 4 西士が言った、「憎悪するよりは、言葉で説得する方が良いことですし、「ただ」説得するよりは、道理によって分析する方が良いことです。（仏・道の）二教を信奉している人々も、共に「私たちの」偉大な父である天主が創ら

れたものですから、私たちの兄弟です。私の弟が正気を失い目茶苦茶でたらめをしたら、兄として私がなすべき道は、「彼を」憐むことでしょうか。それとも憎むことでしょうか。「言うまでもなく」道理によって教え諭すだけです。私は常々儒教の書物を数多く読んでいますが、「儒教では仏・道の」二教や夷狄（異民族）を憎み嫌ひ、「異端（正統でない教説）を斥ける」と言つて排斥するばかりで、優れた道理を掲げ示して非難するということは見られませんが。こちらはあちらを非とし、あちらはこちらを非とし、ごたごたと争うばかりで、互いに信頼しあうこともなく、千五百年の間（意見が）一致することがありません⁽⁴⁾。もし、お互いに道理を踏まえて議論するならば、言わずして是非は明らかにになり、「儒・仏・道の」三教は必ず一つに落ち着きます。

西洋の諺に、『堅く結つた縄は牛の角を繋ぐことができる。道理に適つた言葉は人の心を従わせることができる』とあります⁽⁵⁾。古代、私たちの国の周辺では、三教どころか何百何千という教えが重なりあつてありました。後に天主教の師父たちが正しい道理によつて説き諭し、善い行ないによつて教え導いたために、今では皆天主の教えにのみ従つております」と。

5 中士が言つた、「正しい道は唯だ一つだけです。どうして多くを取る必要がありません。ただ、仏教や老荘の説も、支持するだけの理由はあるのです。そもそも物は最初は空虚であるものが後では充実にきますし、最初は虚無であるものが後では実在してきます。ですから、空や無を万物の根源とみなすことも、「一概に」間違ひとは言えないのです」と。

6 西士が言つた、「『論語』にあるように、」高遠なことに到達するには、卑近なことから学ぶことが根本です⁽⁶⁾。この世の中では、真実であり実在するものが価値の高いもので、空虚であり実在しないものは価値の低いものです。万物の根源なるものは、この上もなく貴く価値の高いものです。空虚であり実在しないという価値の低いもので、これに当てることなど、どうしてできません。まして、自分自身が持たないものを他の物に与えて持たせるなどという

ことは、できるはずがありません。この道理は明白です。今、空虚であるとか実在しないとかいうものが、自分自身は何も持たないというのであれば、どうして「他の物に」形体や性質を与えてその物とすることができましょう。物は必ず内実があつて実在してこそ、物があると言えるのです。「中庸」にあるように、「内実が無ければ物は実在しません。」もし万物の根源が空虚であつて実在もしないものであれば、それが生み出すものも空虚であつて実在もしないものなのです。この世の人は、どんなに優れた能力を持つた者であつても、無いものを有るものとするわけにはいかないのですから、空虚で実在しないものは、その空虚や実在しないことによつて万物を真実かつ実在たらしめることはできないのです。試しに物の存在原因について見るに、それが空虚であつて実在もしないというのであれば、物の始動因・形相因・質量因・目的因となることはできません。⁽⁸⁾ そのようなものは、物と何の関わりがありませんか」と。

7 中士が言った、「御教示は誠にもつともなことです。ただ、物は最初は実在しないものが後には実在するというのは、一理あるのではないのでしょうか」と。

8 西士が言った、「始まりのある物については、最初は実在しないが後には実在する、とすることが出来ます。〔しかし〕始まりのない物については論外です。始まりのない物は、実在しない時がないのです。〔ですから〕最初は実在しないなどという時はないのです。殊更分けて言うならば、それぞれの物は、最初は実在しないが後には実在する、と言うことは出来ます。〔しかし〕もし全体として言うならば誤りです。たとえば、ある人が生まれる前には確かにその人は存在せず、生まれて始めて存在する、というようなものです。しかしその人が生まれる前に、その人の親は存在してその人を生んでおり、世の中の物すべてそうでないものはありません。全く何物も存在していない最初の時においては、まぎれもなく天主がその始源を開いたのです」⁽⁹⁾と。

9 中士が言った、「人は誰でも是非を判断する心を持っています。この〔天主が万物の始源を開いたという〕道理

を悟らないのは、本心を失つたようなものです。¹⁰〔ですから〕誰がそのでたらめ〔な説など〕に従いましうか。もし空虚で実在しないというものが、人間でもなく、靈妙な存在でもなく、心性や知覚もなく、知性や徳性も備えず、誉められるべき善を一つも持たないならば、「それは」価値の低い草や芥のようなものですすら比べようもないものであつて、これを万物の根本と言うのは、実に道理に乖つてことです。ただ、私が聞くところによりますと、空虚で実在しないものは、本当に空虚で実在しないのではなく、形や声のない靈妙な存在にほかならないということですから、〔あなたの説かれる〕天主と何ら異なるところはありませんと。

10 西士が言った、「これは道理をねじ曲げる言い方です。どうか、それを天主と説くことはしないで下さい。そもそも情性や知性や徳性を備えた靈妙な存在は、我々のような形体を持った種類のものに比べると、はるかに精妙で高貴なもので、その道理は、はるかに眞実なものです。どうして形体を持たないというだけのことから、ただちに空虚で実在しないと言うことができましようか。〔仁・義・礼・智・信の〕五常の徳性は形もなく声もないのですが、¹¹誰がこれを実在しないと云えましよう。形体を持たないということと実在しないということは、天地ほどの開きがあるのです。そのようなことを説かれると、世の中に対して〔道理を〕明らかにすることができないばかりか、ますます〔人々を〕惑わせることになります」と。

11 中士が言った、「儒教で〔万物の根源を指して〕太極と言うのは正しいでしうか」と。

12 西士が言った、「私は〔人生の〕後半になって中国に來しましたが、¹²古來の經書については、きちんと読んでいるつもりです。古代の君子が天地の〔主宰者である〕上帝を¹³恭し¹⁴み敬つたということは聞いておりますが、太極を尊び〔これに〕仕えたなどというの¹⁵は聞いたこともありませぬ。もし太極が上帝や万物の始祖であるならば、古代の聖人はどうしてそのことを秘密にしたでしうか」と。

13 中士が言った、「古代においては、その名称はなかつたのですが、その道理は確かに存在したのです。ただその

図や解説は伝わらなかつただけです」と。

14 西士が言った、「そもそも言葉と道理は一致するもので、君子はこれに逆うことはできません。太極の解説(「太極図説」)は、道理になつたものとは言ひ難いと思います。あの「無極にして太極」の図を見ますと、「それは」陰と陽という形を取り上げて表現しているに過ぎませんが、そのような形など一体どこに存在しましょう。太極が天地を生み出す実体ではないことがよく解ります。天主の道理は、古代から今日まで確実に伝わり、完璧で遺漏がありませんが、これを書物に著して他の国に伝えようと思うと、やはりその道理の拠り所を示さないわけにはいきません。まして「太極という」形体もなく拠り所とすべき道理もないものでは、どのような「に示すことができる」でしょうかと。

15 中士が言った、「太極は他でもありません。理に他なりません。もし完全な道理を道理のないものとみなすならば、一体どんな道理があると言えましょうか」と。

16 西士が言った、「ああ、他の物のあり方が道理になつていないのであれば、道理に基いた議論によってこれを正すことができます。「しかし」もし道理そのものが、道理になつたものとして確立していないならば、どうしてこれを道理とみなすことができます。では、私は先ず万物を分類して、道理なるものを本来の所に位置付け、そのあとで、太極の説が万物の根源(「を説明したもの」)ではありえないということを明らかにしましょう。

そもそも万物は二種類に分けられます。それ自体で存在するものと他のものに依存して存在するものとです。他のものに依存してそのものとなるのではなく、それ自体で存在することのできるもの、例えば天地や鬼神や人間、動物や植物や鉱物、四元素(火・土・空気・水)のようなものがそうですが、これは前者に属するものです。それ自体で依存することができるのではなく、他のものに依存してそのものとなるもの、例えば五つの徳(仁・義・礼・智・信)、五つの色(青・黄・赤・白・黒)、五つの音(宮・商・角・徵・羽)、五つの味(辛・酸・鹹・苦・甘)、七つの

情(喜・怒・哀・楽・愛・悪・欲)のようなものがそうですが、これは後者に属するものです。例えば、「白い馬」ということで見るならば、「白い」と言い、「馬」と言いますが、「馬」はそれ自体で存在するものであり、「白い」は他のものに依存して存在するものです。「白い」ということがなくても「馬」は「それ自体として」やはり存在します。「しかし、」もし「馬」が存在しなければ、「馬が」「白い」ということとは決して存在しません。ですから、「白い」は「他のものに依存して存在するものなのです」。

この二種類を比べてみますと、それ自体で存在するものは先にあり、価値の高いものです。他のものに依存して存在するものは後にあり、価値の低いものです。ある物の全体で言えば、それ自体で依存するものは一種類だけですが、他のものに依存して存在するものとなりますと、数えあげることができません。一人の人間について言えば、その人の身体はもちろんそれ自体で存在するものですが、その人の感情や音声、容貌や態度、道徳性というようなものは、すべて他のもの「つまり身体」に依存して存在するもので、その種類は非常に沢山あります。

「さて、」太極というものは、理なるもの「に他ならないということ」によって説明するだけならば、天地万物の根源ではありえません。そもそも理というものは、やはり他のものに依存して存在する種類のもので、それ自体で存在することはできないのですから、どうして他のものを存在させることができましょう。中国の学者や文人が理を説明する際には、「理には」二つの面があると説いているだけです。人の心にある場合と事物にある場合とです。事物のあり方が人の心にある理と合致していてこそ、その事物は真実であると言うことができます。人の心が事物にある理を窮明して、知識を十全なものにすることができたならば、これを「物に格いたる」(事物の理に窮め至る)と言うのです。⁽²¹⁾この両面から見るならば、理は言うまでもなく他のものに依存して存在するもので、どうして万物の根源でありえましょう。この「人の心にある理と事物にある理という」二つのものは、どちらも物「の存在」の後にあるもので、後のものが先のものの根源となることがどうしてありましょう。

また、「太極説を主張する」人々は、何物も存在しない原初の時、理は確かに存在したと説きます。「それでは、

そもそも理はどこに存在し、何に属していたのでしょうか。他のものに依存して存在をするものは、それ自体で存在することはできません。ですから、そのものが依存すべき、それ自体で存在するものがなければ、他のものに依存して存在するものは決して存在することはないのです。もし空虚なるものに依存するだけだと言うならば、恐らく空虚なるものは依存するには不十分なもので、理は必ずや崩壊せざるをえません。では、質問をしてみましよう。「天地を創造したという」盤古ばんこが存在する前に理が存在したのであれば、どうして「理は」物を生み出すように活動せず、じっとしていたのですか。そのあと、誰かが理を刺激して活動させたのですか。「そうしなければ」理は本来動くことも止まることもないもので、自分で活動することなどないはずですから。もし昔は物を生み出すことはなかったが、のちに物を生み出そうとしたのだと言うならば、理は一体意志を持つものでしょうか。どのようにして、物を生み出したいと思ったり、物を生み出したいと思ったりするのでしょうか」と。

17 中土が言った、「その「物の」理が存在しなければ、その物は存在しません。ですから周濂溪先生は、理を万物の根源であると確信されたのです」²²と。

18 西土が言った、「子供がいなければ、父親（というもの）は存在しませんが、子供は父親の根源であると誰が言えましようか。相手があつて始めて存在するものあり方は常にこのようであつて、互いに相手によって存在したり存在しなかったりするものです。君主がいれば臣下がおり、君主がいなければ臣下はおりません。物があれば、「その」物の理があります。ある物が実在しなければ、その「物の」理も実在しません。もし空虚な理を物の根源だとするならば、仏教や老莊の考えと何ら異なるところはあります。こうした考えで仏教や老莊を攻撃するのは、燕の国によって燕の国を討伐したり、動乱の代わりに動乱を起こすようなもの「で、全く意味をなさないこと」です。

今ここに実在する理が物を生み出すことができないなら、どうして昔、空虚な理が物を生み出すことができたでし

ようか。例えば、今ここに車大工がいて、その心に車の理（構造や原理）が備っているのに、どうして一台の車をただちに造り出すことができなくて、材料である樹木や道具である斧や鋸のこぎり、「それに」大工の技術を必要として始めて車がで上がるのでしょうか。原初においては広大な天地をも造ることができた靈妙な力が、どうして今は衰微して、小さな一台の車をも造ることができないのでしょうか」と。

19 中士が言った、「私は〔このように〕聞いております。理は先ず陰陽・五行を生じ、そのあとで天地万物を造化したのです。⁽²³⁾ですから、物を生み出すには順序があるのです。瞬時に車を造るなどというのは、譬えが適当ではありません」と。

20 西士が言った、「それでは、あなたに質問をしてみましょう。陰陽五行〔を司る所〕の理〔である太極〕が動いたり止まったりする時に陰陽五行を生じることができるというのであれば、今ここに車の理が備っているのに、どうして〔その理が〕活動して一台の車をも造らないということがありましようか。また、理が普遍的に存在し、意志を持たないものであるならば、発動し始めたならそのまま決して止まることのない性質を持つているはずです。〔それなのに〕どうして今ここに陰陽五行を生じないのですか。誰がそれを妨げましようか。それに、物という言葉は、すべて実在するものの総称で、すべてのものは物ということが出来ます。〔ところで〕「太極図」の註に、「理は物ではない」とあります。⁽²⁴⁾物は多くの種類がありますが、すべて物と言います。ある物はそれ自体として存在するものであり、〔また〕ある物は、他のものに依存して存在するものです。ある物は形体を持ちますが、〔また〕ある物は形体を持ちません。理が形体を持つ種類の物でないからには、どうして形体を持たない種類の物ではないことがありましようか。更にお尋ねしましょう。理は靈妙な知性でしょうか。道理を明らかにするものでしようか。もし靈妙な知性であり、道理を明らかにするものであるならば、それは鬼神の種類に属するもので、⁽²⁵⁾どうして太極とか理とか言いましよう。〔また〕もしそうでないならば、上帝や鬼神や人間の靈妙な知性は、誰によって得られるのでしようか。理なる

ものは、自分にないものを他の物にその属性として与えることはできません。理が靈妙さや知性を持たないならば、靈妙さや知性を生み出すことはできません。天地の間にあるものを觀察してみても下さい。靈妙なものだけが靈妙なものを生み出し、知性を持ったものだけが知性を持ったものを生みだすのです。靈妙な知性を持ったものから持たないものが生み出されることはありませんが、靈妙な知性を持たないものから持つものが生み出されるなどとは、聞いたことがありません。子供は決して母親を越えることはありません」と。

21 中士が言った、「靈妙な知性は、それを持つものによって生み出されるもので、それは理を指すのではない、ということとはよく解りました。ただ、理が活動して陽〔の氣〕を生じる、その陽〔の氣〕こそが自然の靈妙な知性である、というのは正しいのではないのでしょうか」と。

22 西士が言った、「堂々巡りの議論で、これでは持もちがあきません。こちらからもお尋ねしましょう。その陽〔の氣〕なるものは、何から靈妙な知性を得たのですか。これは自然の道理から大いに外れるものです」と。

23 中士が言った、「先生は、天主は形もなく声もなく、しかも万物に形や声を与えることができるとおっしゃいますが、〔それならば〕太極が靈妙な知性を持たなくても、物に靈妙な知性を与えることができる、というのに何の問題がありませんか」と。

24 西士が言った、「言うまでもなく、形や声を持たないものは精密で高等なものであり、形や声を持つものは粗雑で下等なものです。精密で高等なものが粗雑で下等なものに〔何かを〕与えるというのは、分に過ぎたことではありませんが、靈妙な知性を持たない粗雑で下等なものが、靈妙な知性を持つ精密で高等なものに〔何かを〕与えるというのは、はるかにその分に過ぎた〔、ありえない〕ことです。更に上位のものが下位のものを含むと言う場合、三つのことが考えられます。一つは、下位のもの全体を完全に包括することで、一丈が十尺の全体を、一尺が十寸の全体を載せているような場合がそれです。二つは、下位のもの性質を融合的に包括することで、人間の魂が動物の魂

や植物の魂を包括しているような場合がそれです。三つは、下位のものの特性を純粹に包括することで、天主が万物の徳性を含有しているような場合がそれです。

そもそも天主の徳性は、この上もなく立派で麗しいものであり、人間の心で推し測ることもできなければ、他のいかなる物によっても比較することのできないものです。しかし、今かりにこれを譬えるならば、一枚の金貨が十枚の銀貨や千枚の銅貨の価値を含んでいるようなものです。なぜならば、金の性質は非常に精純で、銀や銅とは非常に異なっているからです。ですから、その価値がこのように何倍もするのです。天主の徳性は、万物の性質を〔そのまま〕明確に備えているわけではありませんが、その精純な特性の中に諸々の道理とあらゆる物の性質を包み込んでおり、すべてのものが備わっているのです。〔ですから、天主は〕形や声を持ちませんが、万物万象を創造するのに何ら困難なことはないのです。

〔ところが〕理というものは、天主とは非常に異なっています。それは他のものに依存して存在する種類のもので、それ自体で存在することはできません。どうして靈妙な知性を持って、それ自体で存在するものとなりえましょう。理は人間より下級の存在で、理は物のために存在しますが、物は理のために存在するものではありません。ですから孔子は、『人が道を弘めるのであって、道が人を弘めるのではない』と説いています²⁷。もしあなたが、『理は万物の靈妙さを持っており、万物を創造する』と説かれるならば、それこそ天主であります。どうして理とか太極とか言う必要がありましょうか』と。

25 中士が言った、「そうであるならば、孔子が『易経』繫辭伝の中で、太極をお説きになっているのは、²⁸ どういう意味ですか』と。

26 西士が言った、「万物を創造する功績^{はたらき}は盛大なものです。その中には当然中樞となるものが存在します。しかし、これは〔あくまでも〕天主が立てたものです。それ以上根源のない最根源者は、理とか太極とかでこれに当てること

はできません。そもそも太極の道理については、従来詳細な議論があり、私もかつて読みましたが、それについての見解をこゝ細かに述べることは控えましょう。他の書物でその要点について述べることもできるでしょうから」と。

27 中士が言った、「吾が国では古代から今日まで、君主も臣下も専ら天地を尊ぶものと理解して、天地を父母のように敬っています。ですから、「天子は」郊社の礼をもって天地を祀るのです。天地が生み出される太極について言えば、世間で亡き父母を尊ぶ(のと同じ)ことです。古代の聖人や帝王・臣下の祀りでは、最初にこれを行うべきだったのですが、今日ではそうではありません。これによって、太極についての解釈が正しくないことが解ります。先生は、このことについて非常に詳しく説明をされました。古代の聖人や賢人と何ら異なる考えではありません」と。

28 西士が言った、「しかし、天地を尊ぶという考え方も、納得し難いものがあります。そもそも最も尊いものは唯だ一つで、二つとはないものです。天と言い地と言うと、これは二つのものです。我々の国で言う天主とは中国語の上帝であり、土で造る女帝や玉皇といった道教の像とは異なるものです。³⁰それらは、武当山に棲んで修業をした者に過ぎず、人間に他なりません。どうして人間が天の帝皇となることができましょう。我々の天主は、「中国」古代の經書で上帝と呼ばれているものです。『中庸』では、『郊社の祀りを行なつて上帝に仕える』という孔子の言葉を用いており、朱子の註釈には『后土に仕えると言っていないのは、文章を省略したものだ』³¹とあります。『しかし』よく考えてみますに、孔子は「仕えるべきものは」一つであつて二つではないということを明らかにしたのであつて、文章を省略したというものはありません。〔經書の中で、上帝に言及した文としては、次のような例があります。』

『詩經』周頌には、『自強の道を執り守られた武王、その功業は強きもの。成王と康王の徳が^{あき}顕らかにされ、上帝はこれを君主とされた』とあります。³²

同じく『詩經』周頌には、『ああ見事な小麦と大麦、大いに〔上帝の〕明德の賜物を受けている。明德は上帝によつて明らかにされた』とあります。³³

『詩經』商頌には、『恭しく優れた徳は日々に盛んになり、その徳は天にまで至つて止むことがない。上帝を謹しみ敬う』とあります。⁽³⁴⁾

『詩經』大雅には、『文王陛下は謹しみ深く、恭しく上帝にお仕えする』とあります。⁽³⁵⁾

『易經』説卦伝には、『上帝は震の卦（東方）から「万物を」生み出す』とあります。⁽³⁶⁾ そもそも『上帝』というのは、天空のことではありません。天空は八方向に広がっています。どうして一つの方角から「万物を」生み出すことができましょう。

『礼記』月令には、『五つの供え物が正しいものであれば、上帝はこれを受ける』とあります。⁽³⁷⁾

『礼記』表記には、『天子自ら耕し、桑（きび）を器に盛り、秬（くろきび）と鬯（香り草）とで造つた神酒を上帝に奉る』とあります。⁽³⁸⁾

『書經』湯誓には、『夏の桀王は罪を犯した。予は上帝を畏れ、自らを正さないわけにはいかない』とあります。⁽³⁹⁾

『書經』湯誥には、『大いなる上帝は、誠の心を人々に降し、不変の徳性に従つて、その道を安んじられる。君主であられる』とあります。⁽⁴⁰⁾

『書經』金縢には周公の言葉として、『汝は上帝の宮廷から命を受けて「天子となり」、その徳教を天下に行きわたらせ、「人々を」助けなさい』とあります。⁽⁴¹⁾ 上帝に宮廷があるのですから、天空が上帝ではないということが解りま

す。

（以上のように）古代の書物をあれこれ見ますと、上帝と天主とは名称が異なるだけだということが解ります」と。

29 中士が言った、「世間の人々は古代の物が好きですが、古代の器物や文章を愛好するだけで、先生のように古代の（書物に書かれている）道理に依拠して人々を教え導き、古代の（人々が説いた）真理を復元するというようなこととはありません。ですけれども、まだ解らないことがあります。古代の書物は、大抵天を尊いものとしています。そこ

で、朱子の註釈では『帝』を天と解釈し、『天は理に他ならない』と解説しています⁽⁴²⁾。程子は更に詳しく、『形体の面からは天と言ひ、主宰の面からは帝と言ひ、性情の面からは乾と言ふ』と説明しています⁽⁴³⁾。ですから、『天地を崇敬する』と説くのです。いかがでしょうか」と。

30 西士が言った、「よくよくお考え下さい。もし上帝を天ということで解釈してよいとします。天は一つの広大なものに他なりません。理から言つて万物の主宰たりえないということは、先に詳しく述べた通りです。上帝という名称は非常に明らかであつて、『あれこれ』と解釈することはできません。まして、でたらめに解釈することができませんか。青々として形体を持った天は、九層に分かれます。どうして唯一の尊いものと言えましょうか。上帝は形体を求めても得られません。どうして「程子が言うように」形体の面から〔天と〕言えましょうか。天の形は円く、九層に分かれています。東であつたり西であつたりし、頭も腹も手も足もありません。もし鬼神と一緒の生きた体であるとすれば、何とおかしな怪しい話ではありませんか。まして鬼神は形体を持たないものです。どうして最も尊い神妙なる〔上帝という〕ものだけが、形体を持ちましょうか。これは、人間の道理を論ずることを知らないばかりか、天体現象や万物各種の本性及道理を知らないということです。天空が尊ぶべきものでない以上、人々が踏み付けにし、汚れ腐つたものが戻つていく大地が、どうして尊ぶべきものでありえましょう。

要するに、一なる天主だけが天地万物を創造し、人類を養い守るのです。宇宙の中にあるものは、すべて我々を養つてくれるものです。「ですから、我々は」天地万物から受けた恩恵の根本〔である天主〕に感謝し、心から崇敬すべきです。この恩恵の大本である主人を棄てて、逆に自分のために働いている者に仕えてよいでしょうか」と。

31 中士が言った、「本当にそのようであるならば、我々にはねじけた心⁽⁴⁴⁾が残つていてということでしょう。そもそも誰でも頭を上げて天を仰ぐならば、必ず天を崇拜するものと納得します」と。

32 西士が言った、「世の中には、智者と愚者の違いがあつて、それぞれに分かれます。中国は大国で、確かに智者

がいますけれど、愚者もやはり存在します。(彼らは目で視ることができると言い、目で視ることができないものを存在しないと云います。ですから、目に見える天地に仕えたと心得ているだけで、天地の主宰者が存在することを一向に知りません。遠くからやって来て長安に着いたばかりの人が、道すがら高く聳え立っている王宮や御殿を見ては驚き拝礼して、『吾が君を拝し奉る』と言います。今、天地を崇敬すると言っているのは、概ねこの宮殿を拝礼するのと同じです。智者は隠れているものを推測し、天が高く地が広い形を見ては、天地の間を主宰する天主が存在することを理解するに至ります。ですから、心を慎しみ正しては天〔地〕に先立つ無形の存在〔すなわち天主〕を尊ぶのです。

一体誰があの青々とした天空を指して、これを崇敬しましょうか。天子が天地と自称することがありますが、これは言い回しに過ぎません。例えば、府や県を治める者が、属する府や県の名称でもって自称するようなものです。南昌府の太守は南昌府と自称し、南昌県の大尹は南昌県と自称します。⁽⁴⁵⁾〔そのように天子が〕天地の主宰者になぞらえて天地と自称することはありますが、天地がその形体だというわけではありません。〔万物の〕根源である主宰者は実在します。〔しかし〕私は、人々がこの万物の根源である主宰者を誤解してこれを天主とみなすことを憂慮しています。〔ですから、〕論議しないわけにはいかないのですと。

33 中土が言った、「御聡明な先生は、万物始源を探究してその実体を認識された上に、その名称まで正確に把握しておられます。あなたのお国では、物事の道理を窮めるのに、一時しのぎの粗雑な議論に終わらせていないということがよく解ります。ですから、私も胸襟を開いて、天主に関する疑いを遺さないようにいたします。また更に〔私は〕我々儒者が重要な事柄はほんやりと見て、他の事ばかりを詳細に研究して、根源に立ち変える学問を知らないということに、大変深く愧じ入っております。そもそも父母は私にこの身体を与えてくれたのですから、孝養を尽くすのは当然です。君主は私に田畑・宅地を下さり、上は父母に仕え下は妻子を養うことができるのですから、⁽⁴⁶⁾敬意を

私うのは当然です。まして、天主は大いなる父母であり大いなる君主であり、祖先を生み、君主を任命し、万物を生み育てた方です。どうしてこのことを誤解し忘却してよいことがありません。お教えは尽きることがありません。他日、完結して頂きたいと存じます。」と。

34 西士が言った、「あなたが求めておられるのは利益ではありません。真理のみを尋ねておられます。大いなる父〔である天主〕は必ず慈愛をもって、説く者が伝えること、聴く者が受けとることを助けて下さるでしょう。あなたが私にお尋ねになれば、何でもお伝えいたしましょう」と。

【注釈】

(1) 『老子』第四十章に、「天下万物は有より生じ、有は無より生ず」とある。また、同第一章に、「道の道とすべきは常の道に非ず」とある。

(2) 『般若心経』に、「色は即ち是れ空なり。空は即ち是れ色なり」とある。色とは感覚的に捉えられるすべての現象を指す。

(3) 『易経』繫辞上伝に、「易に太極有り。是れ両儀を生ず。両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず。八卦は吉凶を定め、吉凶は大業を生ず」とある。宋学の開祖とされる北宋の周濂溪は「太極図」を著し、その解説である「太極図説」の中で、「無極にして太極。太極動きて陽を生じ、動くこと極まりて静かなり。静かにして陰を生ず。…」と説いている。これは、朱子の存在論の拠り所となる。また、「中庸章句」第二十章に、「誠は天の道なり。之を誠にするは人の道なり」とある。これを承けて周濂溪は『通書』誠上第一で、「誠は聖人の本なり」と説いている。

(4) 仏教は後漢の明帝の時代に中国に伝来する。天竺に派遣された蔡愔が迦葉摩騰・竺法兰の二僧と共に仏像・仏経を携えて帰ったのが明帝の永平十年（後六七年）のことである。

(5) 典拠は未詳。

(6) 原文には、「上達は下学を以て基本と為す」とある。『論語』憲問篇に、「子曰く、我を知るは其れ天か、と。子貢曰く、何れぞ子を知るもの莫からんや、と。子曰く、天を怨みず、人を尤めず、下学して上達す。我を知る者は其れ天か、と」とあるによる。

- (7) 「中庸章句」第二十五章に、「誠は物の終始なり。誠ならずれば物無し」とある。朱子は、「天下の物は皆実理の爲す所なり。故に必ず是の理を得て然る後は物の有り」と解釈している。
- (8) 物の存在原因については、首篇の12を参照。
- (9) 原文には、「人人、是非の心有り」とある。『孟子』告子上篇に、「是非の心、人皆之れ有り」と、また同公孫丑上篇に、「是非の心無きは、人に非ざるなり」とあるのによる。
- (10) 『孟子』告子上篇に、「此れ之を本心を失うと謂う」とある。
- (11) 原文には、「神の形も無く、声も無き者」とある。『莊子』知北遊篇に、「之を視るに形無く、之を聴くに声無し」とある。また、『淮南子』原道訓に、「形無き者は物の大祖なり。音無き者は物の大宗なり」とある。
- (12) 『詩経』大雅文王に、「上天の載は、声も無く、臭も無し」とある。
- (13) マテオ・リッチは一五五二年生まれで、中国に入ったのは一五八二年、三十歳の時である。彼が北京で亡くなったのは、一六一〇年、五十八歳の時である。
- (14) 「上帝」は、『書経』『詩経』『礼記』などに頻出する、天地の主宰者のこと。経書に見える、上帝に対する崇敬の表現は、本篇27の西士の発言に引用されている。
- (15) 周濂溪の「太極図」や「太極図説」に当たるものを指す。
- (16) 「無極而太極」は、周濂溪の「太極図説」冒頭の言葉。
- (17) 「太極」に対する朱子の解釈を承ける。『朱子語類』卷一に、「太極は理というものに他ならない」（太極只是一箇理字）。「太極は天地万物の理に他ならない」（太極只是天地万物之理）とある。
- (18) 原文では、「自立の者有り、依頼の者有り」とある。万物全般の分類に関する詳細な説明は、第三篇に見える。
- (19) 中国では伝統的に「鬼神」と言えは、死者の靈魂及び天地の間の様々な靈妙な存在を指す。
- (20) 「五常」「五色」「五音」「五味」については、首篇の8に既出。
- (21) この部分の説明は、朱子の天理概念、格物致知論を踏まえたものである。朱子によって四書の一つとされた『大学』（元来は『礼記』大学篇）の中に、「致知在格物」という表現がある。その解釈については諸説があるが、朱子は北宋の程子の説を承けて、「知を致すは物に格るに在り」と訓じ、「自己の知識を拡大するためには、事物に内在する天理を一つ一つ窮明しなければならぬ」という意味に解釈する。朱子は、『大学章句』中の所謂格物補伝において、この考え方を簡明に論述している。

(22) 原文に「周子」とあるのは、北宋の周敦頤(一〇一七—一〇七三)のこと。字は茂叔、号は濂溪。「太極図」「太極図説」「通書」等を著した。周子は「太極」を万物の根源であるとしたが、理に關しては直接言及してはいない。ここは、太極を理と解釈する朱子の説を踏まえる。

(23) 「太極図」「太極図説」によれば、無極太極—陰陽—五行—乾道坤道—万物化生という生成論的、ないしは存在論的過程がある。

(24) 朱子は「太極図説解」の中で、「太極は形而上の道なり」と述べている。

(25) 原文には「靈覺」とある。動物一般が有する単なる「知覺」ではなく、靈妙な知覺を指す。靈魂の屬性と解することができらる。

(26) ここで言う「鬼神」は、注(19)の一般的な意味での鬼神よりは、カトリックで説く「天使」の意味に近いと言える。

「天神」(天使)と「魔鬼」(惡魔)を併せて「鬼神」と表現する場合がある。第三篇の万物分類を参照。

(27) 「論語」衛靈公篇に、「子曰く、人能く道を弘む。道の人を弘むるには非ず、と」とある。

(28) 注(3)を参照。「易經」繫辭伝は、十翼の一つで、孔子の作と伝えられる。

(29) 「郊社の礼」とは、天子が冬至の日に天を、夏至の日に地をまつる祀りのこと。28で西土が引用するように、「中庸章句」第十九章に、「郊社の礼は、上帝に事うる所以なり」とある。

(30) 玄帝・玉皇は共に天帝のこと。玉帝、玉皇大帝、元始天尊とも言う。

(31) 注(29)を参照。朱子は「中庸章句」の中で、「郊は天を祭るなり。社は地を祭るなり。后土を言わざるは、文を省くなり」と解釈している。后土とは大地の神で、皇天(上帝)に対する。

(32) 「詩經」周頌執競に、「競きを執る武王、競きこと無からんや維の烈。頭らかならざるや成康、上帝、是れを皇とす」とある。

(33) 「詩經」周頌臣工に、「於皇いなるかな來と牟、將いに厥の明を受く。明、上帝に昭らかなり」とある。

(34) 「詩經」商頌長發に、「聖敬、日に躋り、昭假、遲遲たり。上帝を是れ祇む」とある。

(35) 「詩經」大雅大明に、「維れ此に文王、小心翼翼として、昭らかに上帝に事う」とある。

(36) 「易經」説卦伝に、「帝は震に出づ」とある。

(37) 「礼記」月令篇に、「五者備に当たれば、上帝其れ饗く」とある。

- (38) 「礼記」表記篇に、「天子親ら耕す。糞盛相鬪、以て上帝に事う」とある。
- (39) 「書経」湯誓に、「夏氏に罪有り。予は上帝を畏れ、敢えて正さずんばあらざるなり」とある。
- (40) 「書経」湯誥に、「惟れ皇いなるかな上帝、衷を下民に降す。恒有るの性に若い、克く厥の猷を綏んぜしむ。惟れ后なり」とある。
- (41) 「書経」金縢に、「乃、帝の庭に命じ、四方に敷佑せよ」とある。
- (42) 「周易本義」説卦伝において朱子は、「帝は震に出づ」(注(36)を参照)の語に対して、「帝は天の主宰なり」と註釈を施している。また『孟子集註』梁惠王下において、「天とは理のみ」と説いている。
- (43) 程子とは、北宋の儒学者程頤(一〇三二—一〇八五、字は伯淳、号は明道)と程頤(一〇三三—一一〇七、字は正叔、号は伊川)の兄弟を指す。共に周濂溪に学び、朱子の思想形成に大きな影響を与えた。両者の語録である『二程遺書』の巻二四の中で、「天と上帝との説は如何」という質問に対して、「形体を以て之を言えば之を天と謂い、主宰を以て之を言えば之を帝と謂い、功用を以て之を言えば之を鬼神と謂い、妙用を以て之を言えば之を神と謂い、性情を以て之を言えば之を乾と謂う」と答えている。
- (44) 原文の「蓮心」とは、よもぎのようにねじ曲がった心のこと。『莊子』逍遙遊篇に、「夫子は猶お蓮の心有るなり」と見える。
- (45) 南昌は江西省の地名。太守は知府の、大尹は知県の、それぞれ俗称。マテオ・リッチは、一五九五年からしばらく南昌に滞在していた。この文章はその時期に書かれたと考えられる。リッチの報告書の第三の書・第三章を参照。
- (46) 『孟子』梁惠王上篇に「明君は民の産を制し、必ず仰いでは以て父母に事うるに足り、俯しては以て妻子を畜うるに足り、榮歳には終身飽き、凶年には死亡を免れしむ」とある。

(一九九五年一〇月、ローマにて稿了)